

## 国際化する大学の環境

紀谷万里子

### 「留学生 30 万人計画」

これは、2008 年に福田元首相が掲げた政策である。近年、日本から海外へ留学する人が減少しているため、現安倍政権も教育改革の一環として「グローバルな人材育成」に力を入れている。

このような中、慶應義塾大学では、学生たち自らが主宰し、運営する国際交流プログラムが存在する。

2014 年 9 月、The Silicon Valley Keio International Program 通称 SKIP というスタンフォード大学と慶應義塾大学の学生とが集う国際交流プログラムが日本で開催された。スタンフォードの学生が 2 週間日本に滞在し、慶應の学生と様々な活動を共にする国際交流プログラムだ。今年スタンフォードの学生 11 人を迎え、東京、埼玉、福島を訪れた。日本の技術力や宗教行事などの文化体験、キッコーマンや Honda など日本を代表する企業の見学を行った。福島では、震災で大きな被害にあったいわき市を訪れ、現地の方々との交流、沿岸部や現地の企業の訪問を通して、被災地の現状への理解を深めた。

SKIP は、代表を務める門田将徳さん（慶應義塾大学 3 年）の日本の底力を海外の学生に知ってほしい、という熱意から 30 年の時を経て再開したプログラムである。8 ヶ月もの時間をかけ、深い議論の上で企画を行っている。

その他にも大学ではグローバル人材を育成するため、あらゆる団体が存在する。ひとえに国際交流サークルといってもその活動は様々だ。

AIESEC という団体では、所属メンバーに海外インターンシップの体験を提供する。一方 PLURIO という団体は、慶應大学へ通う留学生と気軽に英語で会話できる場を提供することが主な活動だ。

また大学側も国際的な人材を育成するため、留学や海外プログラム、インターンシップなどの機会を学生に提供している。大学内には国際センターが設置されており、200 以上の協定校と交換留学プログラムを開催している。国際センター所長、友岡教授は、「他文化交流を通じながら相手を知ることが重要」と語る。

大学または学生団体が提供するプログラムにはそれぞれに特色があり、学生は自分の求めるものに応じて選択することが可能だ。

このように、大学内においても「国際的な環境（もしくはその環境に身を置く手段）」があるのは明らかだ。今後は他にも「国際化」の形が増えていくことに期待できるだろう。

### 編集後記

近代の日本は「国際化」という言葉を好んで使う。しかし、その実質的な意味を探るために学生団体、そして学校の国際センター所長に話を聞いたことから、「国際化」には多様な定義が存在することに気がついた。学生側と学校側はそれぞれの団体やプログラムを通して「グローバルな世界」に対応している。留学生数が減っている中、「国際化」を意識している大学の現場について正確に伝えられるように心掛けた。